

特別講演

学問の行方

山折哲雄 前国際日本文化研究センター所長

(本稿は、平成18年4月10日日本学術会議第148回総会において行われた講演の記録である。)



1

日本学術会議の会員の皆さんが推進してきているご努力に敬意と感謝を表明する。本日は、哲学と宗教学をやってきた者の立場から、「学問の行方」についての感想を述べたいと思う。いま、人文学の衰退ということが言われている。かつて「哲史文」という言葉があったが、その頃の状態に比較すれば、この20年間ほどで、人文学は死文化したということではないだろうか。

2

その背景として、第一に、大型類人猿の学問、つまり猿学が大きく発展してきたことを挙げることができる。最近、グドール、ドーキンス等の動物行動学者が中心になって編集した「大型類人猿の権利宣言」と題する論文集に接したが、これによれば猿の権利は人間の権利に限りなく近付いてきたと言っている。しかも、編者の一人によると、このことは1948年の「共産党宣言」以来の事件だとも主張しているのである。この論文集は、皮肉なことに、現代の人文学が直面する危機意識を見事に表現している。人間を知るためには猿の社会を知ることだ、と言っているからだ。ところで、日本の猿研究は世界水準の最先端をいっている。その理由は、欧州にお

いては猿が進化論的に下位に位置付けられているのに対し、日本では輪廻説の伝統があるためか、互換的な関係に位置付けられているからではないか。私は、日本の研究者と猿とが横に並んで落日を見詰めている写真を見たことがある。猿に落日の美しさが分かるのかどうか甚だ疑問ではあるのだが、ともかく、そのような類人猿学の隆昌と普及にともなって、人文学が衰退の道を辿ってきたのはやむをえなかった。

3

第二に、ロボット工学研究の肥大化がある。産業ロボットだけではなく、介護ロボット、ペット・ロボット等も登場している。直立二足歩行のアイヴォやアシモがつくられた。その上、今日では、脳科学研究の成果をプログラム化して、自立的行動の可能なロボットへの展開も話題となっている。「科学には不可能の文字があるが、工学には不可能の文字はない」と言ったエンジニアがあるが、今後、人工心臓、人工知能を体内に埋め込み、「人のことはロボットに問え」という時代が来るのかも知れない。かつて「人のことは人に問え」と言った13世紀の道元がこのことを知れば、びっくり仰天するに違いない。人文学は猿学とロボット工学に挟撃され、息の根を止められようとしているのである。

4

この動きをさらに加速化させているのが、生命科学だ。私は生命科学についても素人だが、これまで脳死や臓器移植の問題については若干の発言をしてきた。かつて人は「人間」と呼ばれていたが、それがいつのまにかこの分野では「人」となり、やがて「ヒト」という表記に変わった。「人間」から「間」が取り除かれてしまったのだ。「哲史文」と言われていた頃には、「存在としての人間」が考えられていたが、今日では「操作的なヒト」という認識に摩り替えられているようだ。私は生命科学の成果を尊重するものではあるが、「人間」に対する認識がこのように変化してしまえば、天を仰いで嘆息するよりほかはない。こうして、「ヒト」は限りなく「モノ」に近付いた存在として捉えられ、両者の境界が曖昧化してきている。以上見てきたように、猿学、ロボット工学、生命科学という3者によって、人文学は真綿で首を絞められ、息も絶え絶えになっているのではないだろうか。

5

今から40年ほど前のことだが、昭和40年に岡潔(数学者)と小林秀雄(文学者)の対談が『新潮』に掲載された。『春宵十話』を刊行した岡潔

に小林が興味をもったからだろうが、人間としての岡潔の存在感がにじみ出ていて興味深い。冒頭、岡潔は「ピカソの絵には救いがない。暗闇の世界だ。仏教でいう無明の世界そのものだ」と述べ、その頃、「近代絵画」というエッセイを連載していた小林秀雄は、岡の発言を黙って聞き、頷いていた。やがて、岡潔は、20世紀は戦争と物理学の世紀であったと言い、物理学がやったことに二つあると言う。一つは、原爆や水爆に象徴される「破壊」という仕事。そもそも物理学や自然科学は「創造」なるものを一つもやってはいない。葉緑素一つ作れないではないか。この点一つをとっても、これからの新しい世代に対する科学教育をどうやるか、考えねばならない問題である。もう一つ、「破壊」のほかに、物理学がやったことは「機械的操作」である。先ほど出した事例で言えば、ロボット工学や生命科学の分野でやっていることがそれだ。耳を傾けるべき見解ではないだろうか。

6

岡潔の「仮説」に、もう一つ面白い問題がある。人間は、いったいどの成長段階で「1」を発見するのかというテーマを扱ったものだ。「ゼロ」の発見はインド人が7世紀に行ったが、「1」についてはこのような疑問を発した数学者はい

なかったのではないか。岡潔は不遇の人で、京都大学を出た後、広島大学で教え、その後、奈良女子大に移っている。私も、3年間奈良に住み、岡潔の幻を見ながら散歩していた時期がある。岡潔は、数学的な「1」が人間のどの成長過程で発見されるのかを考え続けていたが、ある日、直感を得て、誕生直後の赤児の成長過程を観察すれば分かるのではないかと考えた。そこで、彼は孫の成長過程を観察し、赤児は出生18カ月後で全身運動を行うということに着目する。そして、その時に、人間は「1」を発見するのではないかと推測したのだった。私は、その時、赤児は「1」を発見すると同時に「全体」も発見したのではないかと考えたが、どういうわけか岡は「1」についてしか述べていない。ともかく、この対話には新鮮な意見が飛び交っていて、興味が尽きなかった。時間の関係から、小林秀雄の発言を紹介できなかったのが残念であるが、そこには、人文学の去就と科学の行方を巡って示唆的な見解が披瀝されていたのである。「文理融合」などというステレオタイプの議論などではない。人間の学問についての真剣な対話が交わされていたのである。

7

それから暫く経って、私は必要に迫られてへ



レン・ケラーのことを調べていた。三重苦の人が、一体どうして、あれだけの人格を形成し、あれだけの人間になったのかということである。教師・サリヴァンの果たした役割はもちろん大きかった。そのサリヴァン先生がやって来たのは彼女が7歳の時。彼女は、水を手に注がれ、掌に「水」と書かれて、モノには名前があることを直感的に知ったというが、その心理的、身体的なメカニズムの詳細は分からない。やがて私は、三重苦の原因となる熱病に罹ったのが生後19カ月後だったということを知らされた。ヘレン・ケラーは、その病気になる前に既に「1」を発見していたのである。「全体」を発見していたのではないか。だからこそ、彼女は三重苦の運命を克服することが出来たのだと思ったのである。これは私の直感である。今のところ実証など出来そうもない。しかしながら、こういうと



ころこそが人間研究の面白いところであり、人文学が挑戦すべき研究課題なのではないか。

日本の学問よ、一体どこに行く。